

め、実に教養なく常識なき田舎資本家の典型的なものである。従つて、その下に雇傭され、労働者の状態が冷酷悲惨を極め、常に驚くべき長時間の労働を強要され、而して低廉極まる賃銀を以て酷使され、たゞは云ふ迄もない、即ち階級闘争の発生と激化とは避け得べからざる必然として十分に準備されたる。

こと一四月、瀧呂の労働者十余名は集つて瀧呂製陶労働組合を組織し、日本製陶労働同盟に加入した。その右會員は次第に増加して八月迄には二百五十名に達し、窯焚夫、運搬夫、画工、女工等も亦、輪廻工、雑役夫等、主要男工の殆んど全部を包容するに至った。この時、果然、今回の大争議の勃発を見るに至った。

争議発生之近因

今回の争議の直接原因となつたものは不景氣から来る生産過剰であり、更にその機を悪用した資本家の過激なる賃銀値下げ要求である。大正十三、十四の二年を通じて、アメリカ向輸出陶器は好況であつた工場は拡張され、生産力は増大した。必然の反動として不景氣が来た十五年春以来、瀧呂の製陶工場は生産過剰に苦しみ、滞貨山積するに至つた。之實に彼等製陶資本家が無謀なる工場拡張の必然の結果である。而して彼等は、尙も自らの責任を相与ることなく、不景氣が来る一切の損失を悉く労働者に負担せしめんとして、三月にまで賃銀一割を値下し、次で五月まで一割を値下した。組合、組織尚鞏固でなかつた労働者は、この無法慘酷なる要置に對しては、唯涙を吞んで屈従するのみ、仕方なかつた。